

戦姫たちのヒーローア
カデミア

文月 夏樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

響たち装者が降り立ったのは、僕のヒーローアカデミアだった。救助訓練中のヒーローの卵たちにヴィラン連合の魔の手が迫る。危機に陥る彼らの前に現れる装者たち。今世界を超えた共闘のとき。前 戦姫絶唱シンフォギアXD《だけど、私はここにいる》

目次

事件の始まり	s i d e 戦姫	7
1		
異世界、到着！		14
ヒーローの頂点		22
事情説明と異変		30
ヒーローのいる世界		37
ヒーローの裏事情		45
ヒーローの資質とは		50

事件の始まり sideヒーロー

この世界には『個性』と呼ばれるものがある。

かつて中国で光る赤ん坊が生まれた事件以来、世界中で常識ではあり得ないような能力や姿を持つて生まれてくる子供が後を絶たなかった。本来であれば、そのような特異な存在は異物と見なされ、社会から排斥されるはずであった。

しかし、現実は大方の予想を裏切りそのような特異な力、後に『個性』と呼称されるそれらを持った子供が年々増加していった。そのため、世間もその存在認めざるを得なくなつていったのである。時を経るにつれて『個性』を持つものは増え続け、現在では全人口の九割以上の人間が能力の大小はあるが『個性』を持つまでに至つた。

大多数の人々に『個性』が発現するようになり、政府は増加し続ける『個性』への対応に追われることになる。そんな中で作られたのが『個性』の使用を禁止する「個性対策基本法」である。これにより政府は人々の『個性』を制御しようとした。だが、人間とは得てして愚かなものである。禁じられれば使いたくなるのが人の性とでもいうのか、法が施行されて以降『個性』を用いた犯罪が増加していった。

さらに、法の中で「個性の一切の使用を禁じる」とあるために警察が『個性』を用いた犯罪に対処する際に犯人は捕まるまいと『個性』を使用するのに対し、警察側は法で禁止されているため使用できないという不利を抱えることになってしまった。

そんな状況を打破したのが、ヒーローの存在である。

ヒーローの始まりは「個性対策基本法」の違反者であった。自分が犯罪者になろうとも、自分の『個性』が泣いている誰かを救うためになるのなら、そんな思いのもと戦い続ける者がいた。そんな彼の孤独な戦いは、多くの仲間と賛同者を得ることで終わったのだ。彼の賛同者たちによって、彼のために作られた「ヒーロー基本法」によって、『個性』の使用を国家資格とすることで、『個性』の乱用を防ぎ、犯罪の取り締まりや災害救助において『個性』を活用できるようにしたのである。

しかし、光があれば同時に闇も生まれるのは必然であった。今までの『個性』の乱用は若者の若気の至りのようなものが多かったが、取り締まる側が『個性』を使用するようになり、それに対抗するかのごとく殺人や強盗といった重犯罪においても『個性』が使用されることが多くなっていった。

そのため、ヒーローたちが己の『個性』を用いて犯罪者を取り締まることが主な活動となるのに時間はさしてかからなかった。そして、犯罪者たちはヒーローに敵対する者ということから敵^{ツライ}と呼ばれるようになった。

ヒーローとヴィランの戦いが続いているとはいえ、大半の一般人たちは犯罪に巻き込まれることもなく平和を謳歌していた。あるときまでは……。

それが現れたのは突然だった。

その日はとある敵が銀行強盗を行い、銀行内に人質を取り立てこもる事件が起きた日だった。そんな敵に対し警察やヒーローが銀行を取り囲み、人質解放のために懸命の交渉を行っていた。

ところが交渉を行っている中、受話器から銀行内の怒声と断末魔のような悲鳴が聞こえてきたのだった。

あまりの異常事態に警察とヒーローたちは銀行内への強行突入を決断したのである。ヒーローの一人の『個性』により、銀行のシャッターを破壊し雪崩込むように突入した彼らが見たのは、大量の炭であった。立てこもっていたはずの強盗犯や人質たちの姿は一切なかったのだ。しかし、人はいないにもかかわらず壁や床の破壊痕がここで戦闘が起きていたことを如実に語っていた。そうなるのと不可解なのは床一面にある大量の炭である。警察やヒーローたちは炭の存在に疑問を抱きながらも強盗犯の確保と人質の

救出のために搜索を開始した。だが、どれだけ探しても銀行内には人っ子ひとりいなかったのである。

搜索の手がかりを求めて警察が監視カメラの映像を確認した際にそこに映っていたのは、半透明な生物のような何かが強盗犯も含めて銀行内の人々を次々と炭に変えていく瞬間だった。その生物のような何かは体を引き伸ばしたような形になり、強盗犯や人質たちに一直線に飛びかかっていった。それらに体を貫かれた人々は体がどんどんと黒ずんでいき、最後には崩れてしまったのである。常規を逸した光景に映像を見た者は大半が顔をしかめ、中には口を押さえて部屋を出ていく者もいた。

銀行内の悲惨な映像を見終えた警察とヒーローたちは生物のような何かについて議論を行った。その議論の中では様々な推測や憶測が飛びかっていた。曰く誰か別の敵の『個性』である、曰くどこかの国で開発された生物兵器である、曰く増えすぎた人類を粛清するために神が使わした天使である、曰く悪魔である、などなど謎の存在の正体についてあれこれと議論していたが情報があまりにも不足していたため何も進まなかった。そんな中、映像の中に謎の存在の正体についてつながるヒントがないかと、映像を見ていたヒーローの一人が突然立ち上がったのである。

人が炭に変えられるという衝撃的なことにばかり、意識が行ってしまい気づくのが遅れてしまったが、謎の生物の恐るべき特長はもう一つあったのである。そのことに気づ

いたヒーローはあまりの動揺に立ち上がってしまった。他のヒーローや警察の注目を集めてしまったが自分が気づいたその生物の悪夢のような特長について説明するのにちょうど良いと、彼は自分を無理矢理納得させ映像を見せながら自分の推測を話し始めた。そして、彼の推測は他のヒーローや警察を絶望の淵に追い込むのに十分な力を持っていたのだ。その内容とは言葉にするととても簡単なものであった。それは「謎の生物にはどんな攻撃も通用しない。」ということである。銀行内の映像で強盗犯はもちろん、人質の人々もそれぞれの『個性』を用いて攻撃を行っていた。炎や石を飛ばす、高速で近づき殴るなど本当に様々な攻撃をである。しかし、炎や石は謎の生物をすり抜け後ろの壁や床を傷つけるばかりで、近づいて殴った者に至ってはそのまま炭にされてしまっていた。

改めて思い知らされた謎の生物の異常とも言える力を前にしてヒーローたちは何もできない自分の無力さに打ちのめされていた。会議室の中を絶望と諦めが覆い尽くさうとしていたそのとき、会議室のドアが力強く開かれた。ドアを開けて入ってきたのは日本のヒーローたちの中で最強にして平和の象徴とまで言われるヒーロー。

「諦めるな。私が来た！」

そう、
No. 1ヒーロー、
オールマイイトである。

事件の始まり side 戦姫

この世界には特異災害と呼ばれるものが存在する。

ノイズの存在は遙か昔より知られていたが、一般まで認知が広がったのは比較的最近と言えるだろう。

何故なら、ノイズは災害というだけあり、いつ・どこで発生するのかわからず、発生頻度もそこまで高くはないため、多くの人はノイズと遭遇せずに人生を終えることが多かった。

そのため、ノイズに遭遇する確率は一生涯で強盗にあう確率よりも低いといわれている。しかし、そんなごく稀と言える確率を引きノイズと出会ってしまった場合、ほぼ100%の確率で命を落とすことになる。

その原因はノイズの持つ二つの力によるものである。一つ目は、『位相差障壁』と呼ばれる力で、自身の存在の位相をずらすことによりそこにいないのにいない、といった逆透明人間のようなものである。そのため、ノイズは障害物を無視して直進することができる。またこちらからの攻撃を受けず一方的に攻撃ができるのである。

二つ目は、『炭素変換』である。この能力こそがノイズと出会った場合にほぼ100%

命を落とす原因と言われる。この能力の説明としては至って簡単なもので、ノイズと接触した人間をノイズもろとも炭素に変換する能力である。

このようにノイズはとても恐るべき力を持った災害なのだ。

しかし、人間とは呑気なものでこのように危険なノイズすらも、対岸の火事のように自分の身に起きるわけがないと高をくくっていた。

だからこそ、その事件が起きたのはある種必然であったのだろう。

それは、日本を代表するアーティストユニットであるツヴァイウイングのライブで起こった。

ライブ中に突如ノイズの襲撃にあったのである。

ノイズの近くにいた観客はノイズとともに炭素となり、運良く免れた観客は我先にと出口に押し寄せた。それにより、転倒し多くの者に踏まれる者や人を押しのけようとし、乱闘を起こす者たちなどライブ会場は自らが生きるために他者を蹴落とす地獄となった。

このライブでの事件が原因となり、ツヴァイウイングの片翼である天羽奏が命を落とした。だが、それはノイズにより炭素にされたわけでもなく、観客の暴動に巻き込まれ

たわけでもない。その死の原因を語るためには、とある武装について語らなければならない。

その武装の名は『F G式回天特機装束』通称『シンフォギア』である。これは日本の研究者、櫻井了子の提唱した櫻井理論もとに聖遺物の欠片から作られるノイズに対する唯一の対抗策である。

そして、ツヴァイウイングの風鳴翼と天羽奏はこのシンフォギアの使用者、すなわち装者である。いや、装者であった。というのが正しいだろう。シンフォギアは誰にでも使えるものではない。聖遺物ごとの特定振幅の波動、すなわち歌に合致しなければ使用することすらできないのだ。

だが、使い手を選ぶ武器など不良品もいいところである。そのため、誰にでもシンフォギアを使用できるようにとのコンセプトで研究が行われていた。その研究の答えとして生み出されたのがLINKERと呼ばれる薬物であった。そして、このLINKERによって無理矢理適合したのがツヴァイウイングの片翼、天羽奏である。

しかし、無理矢理適合したのだ反動が無いわけがない、LINKERの使用には苦痛を伴い、その上持続時間も短いと欠点ばかりであった。

ライブ事件の際にも天羽奏はシンフォギアを纏い、相棒である風鳴翼とともにノイズを殲滅していった。殲滅行動中、会場から逃げ遅れた少女を見つけ、ノイズの攻撃から

少女を守り続けていたが、持続時間も限界となり、ギアの出力が大幅に低下してしまつた。それにより、ギアの一部が破損し、後ろでかばつていた少女の胸にその破片が突き刺さつてしまつたのである。少女は胸から激しく出血しており、もう一刻の猶予もない状況であつた。そして、天羽奏自身もギアの出力低下により劣勢を強いられていた。

そんな追い詰められた状況の中、彼女は一つの決断を下した。シンフォギアにいくつか備わっている決戦機能の一つ『絶唱』の使用である。彼女の絶唱によりライブ会場内のノイズは一体残らず殲滅されたが、その代償である莫大なバックファイアにより天羽奏はその若き命を散らすのであつた。

ライブ事件から数年の後、天羽奏が命を懸けて守つた少女、立花響がその身に宿した聖遺物の力を覚醒させ、装者として目覚めたことをきっかけとして、世界を巻き込む様々な事件が起きていく。その事件についてはしかる後に、語ることにしよう。

様々な事件を解決してきた少女たちは、東の間の平穏を享受していた。

しかし、東の間の平穏とは脆くも崩れさるものである。

彼女たちの活動の拠点としているS.O.N.Gの前身たる特異災害対策機動部二

課がかねてより保有していた完全聖遺物である『ギャラルホルン』が再び起動したのである。

このギャラルホルンは並行世界同士をつなぐ性質があり、以前にも少女たちは並行世界に赴き、異変の解決をしてきたのである。

ギャラルホルンの再起動により、緊急召集がかけられ少女たちは司令部に集結したのであった。そこで、今回つながった世界について忠告を受ける。それは、今回つながった世界の反応が今まで観測されてきたどの世界とも類似せず、並行世界というよりもある種異世界とも言える世界であると言うことである。そのため、より一層の警戒も持つて任務にあたる必要があるというものであった。

つながった世界についての説明と忠告を受け、少女たちは今回世界を渡る者を相談し始めた。その結果、三人の装者が今回の異世界に赴くこととなった。風鳴翼、立花響、雪音クリスの三人である。

その選出理由としては今回の並行世界が異世界と呼べるほど違うためにLINKERがなければ安定してギアを纏えない他の三人では、不測の事態に対応できない可能性があること。戦い方のバランスや連携の習熟度などの関係である。

そのような様々な理由から選出された三人は早速出発せんと、ギャラルホルンの安置

された部屋に来ていた。

ギアを纏い、いつでも出発できる状態となった少女たちに残る者たちが声をかけていく。

「さて、何度も言うが無理だけはするなよ、三人とも。」

S. O. N. Gの司令官である風鳴弦十郎からは心配の声を、

「こちらからでもできる限りの支援はしますので、頑張ってください。」

風鳴翼のマネージャーであり、S. O. N. Gのエージェントである緒川慎次からは
激励を、

「翼、さつきと終わらせて、早く帰ってきなさい。そしたら次のライブの打ち合わせをしましょう。」

「クリス先輩ならちよちよいのちよいデスよ。」

「響さんはいいつも通り、まっすぐに一直線に行けば大丈夫。」

そして、残る装者三人からそれぞれに向けて言葉が送られる。

「ああ、楽しみにしてるぞ、マリア。」

「あたりめーだつての。」

「ありがとう、調ちゃん。」

それぞれに言葉を返し、ギヤラルホルンの生み出すゲートをくぐっていった。

つながった世界は様々な『個性』を持ちしヒーローたちが人のために戦い続けている世界だ。

さて、彼女たちは向かった世界で何をなすのであろうか。

異世界、到着!

ゲートを抜けた先は、いたって普通の公園であった。

あまりに普通の光景に身構えていたことがバカらしくなってしまうほどだった。そして、今までの並行世界であったようにいきなりノイズに襲われることもなく、まさに平穏と言えるだろう。

通信をつなげ、周囲の状況を本部に伝えた。また、本部からも三人の周囲にノイズの反応や正体不明の反応などが無いことを伝えられた。

三人は周囲の安全が確保されていることが確認されたことで、ギアを解除し、普段の服に戻った。

三人が出現した位置より、少し離れた場所にてとある敵がタイミングを見計らっていた。その敵は異形型の『個性』が原因で学校でいじめを受けており、どうにもならない異形の自分の姿や何もしていないのにまるで悪者のように扱ってくる周りに嫌気がさ

し、やけっぱちになっていた。

しかし、いきなり大通りで暴れられるような度胸が中学生にあるわけもなく、結果このような人のほとんど来ない公園で通りかかった人を驚かしてやろうという、何とも小さな行動となったのだった。

そして、ついに彼の第一の被害者(予定)が近づいてきた。近づいてきたのは男であった。その男は金髪のガリガリで見るからに弱っており、フラフラとおぼつかない足取りで歩いていた。

敵の少年はその男の悲惨とも言える姿を見て、自分のしやうとしていることに対して罪悪感を抱き始めていた。

しかし、少年もここまで来てしまった以上引き下がれない。『個性』をより強く発現させることにより少年の体はさらに大きく、強靱なものに変化していく。

体の変化を終えた少年の体はまさに化け物と言つていいほどに変わり果てていた。変化後の姿はSF映画に出てくる凶悪なエイリアンのようであった。

化け物は茂みより飛び出し、通りかかった男の前に立ち塞がった。

「な、敵だど!？」

突然の出来事に男は驚くも、男の体は今までに積み上げてきた経験をもとに無意識に構えをとらせていた。

しかし、化け物となった少年にも咄嗟に戦闘態勢に入った男にも、予想していなかった乱入者が現れる。

時は戻り、響たちがシンフォギアを解除したころまで遡る。

「さて、まずはどうしましょう？ 翼さん。」

「ふむ、まずはこの世界の常識や大きな事件について近くの人に聞いてみる、というのが定石だろう。」

「ま、いーんじゃねえの。」

「よーし。そうと決まれば早速人を探して聞き込みをして行きましょう！」

響たちはこの世界に起きている異変について情報を集めるために行動を開始しようとしたところ、

「翼！ 響くん！ クリスくん！ 聞こえるか！ そこから北に100メートル先、未知のエネルギー反応を感知した。カルマノイズのようなその世界独特の存在の可能性もある、十分注意して向かってくれ。」

風鳴弦十郎からの緊急通信が入ったのだった。

「了解！」

響たちは、通信で伝えられた北100メートル地点へと急行した。

そこで装者たちが見たのは、2メートル近い異形の怪物に襲われかけている男性の姿だった。

その光景を見た瞬間、響は一瞬の躊躇もなく一直線に怪物へ向かって駆けだしていった。

B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o n

響が口ずさんだ歌こそ、シンフォギアを起動させるために必要なトリガー、聖詠である。

聖詠を歌い終えた響を包むように起動したガングニールのエネルギーはギアとして再構築されていた。

響の持つガングニールは展開されると白とオレンジを基調としたボディーツとなり、前腕部には半円柱状の装甲が生成される。そして、腕部と脚部にはそれぞれパワージャッキ内蔵されている。

変身を終えた響は脚部のパワージャッキを展開し、地面を強く打ちつけることによ

り、さらさらに加速し、

『最短でまっすぐに、一直線に』

そんな思いとともに響は一条の流星となった。

「来るなら来い！私が相手になろう。」

ガリガリの男性は目の前の敵に対して、啖呵を切る。そのガリガリの体から出ているとは思えないような威圧感に、ただの中学生でしかない敵は吞まれて動けなくなっていた。

それもそうだろう。ガリガリなため気づく者はいないが、彼こそがヒーローたちの頂点に立ち、平和の象徴とまで言われる男、オールマイトなのだから。

そして、数多くの敵と戦い続けてきたオールマイトだからこそ気づくことができた敵の戦意のなさ、憤りや悲しみに。

そんな敵に対して攻撃するべきなのか、そんな思いが脳裏をよぎった。

ドゴン!!

何かが地面を強く打ちつける音が響いた。

音につられて、音の方向に顔を向けたときにはオレンジ色の流星が地を駆け去った後だった。

ズドン!!

再び重い音が公園に響く。

流星の速さによく首が追いつき、オールマイトは音の正体に気づいた。

それは、不思議なコスチュームを身につけた15、6歳の少女であった。少女は先ほどまで敵がいた場所におり、その構えは八極拳の鉄山靠のようであった。いや、そうだったのだろう。その圧倒的な威力で敵を弾き飛ばしたのだと、オールマイトは悟った。

少女はこちらを見るなり、声をかけてきた。

「早く逃げてください。あの怪物は私が引き受けます。」

少女の言葉に理解が追いつかない。今の逃げろとは誰に向けたものか？私だ。ヒーローである私に何故？そんな言葉が頭の中を駆けめぐっていた。

そのために少女の次の行動への対処が遅れた。

ガキン！ズドン!!

少女の脚部からパワージャッキが展開され、地面に叩きつけられた。オールマイトは理解した。先ほどの音の原因は彼女だと、そしてこのままではあの敵は少女によって殺されてしまうということを。

その瞬間オールマイトは彼女の後を追い、駆けだした。先ほどまでよろよろと足取りがおぼつかなかったとは思えないような躍動感に溢れる機関車のような走りであった。(今日の制限時間はすでに使い切った。今全力で走るのですら限界だ。)

走り出して数秒、すでにオールマイトの体力は底をつき始めていた。

ヒーローの頂点とま言われた男がどうしてこうなっているのかというと、それは数年前に遡ることになる。

数年前、オールマイトとはある敵との戦いの中で大怪我を負った。呼吸器は半壊し、胃は全摘出された。それ以来オールマイトの体は徐々に衰えていったのである。

しかし、それでもオールマイトは諦めなかった。体に残された僅かな力を集約し、一日に三時間だけ、かつてのような力を取り戻すことに成功したのである。

だが、オールマイトも自覚しているように、今日使える分はすべて使い切ってしまった。

オールマイトは自身の限界を悟り、不甲斐無さを自嘲する。

(・・・限界？限界だと？情けない・・・情けない!! 皆を諭しながら己が実践しないなんて。)

オールマイトの瞳に、脚に、身体全てに力がみなぎっていく。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの。限界を乗り越えていくもの。
Plus Ultra!!」

オールマイトはさらに加速していく、過去の限界を置き去りにするかのように。

ヒーローの頂点

オールマイトは走った。己の限界を超え、少女を止めるために。

そして、ついに少女の姿を視界にとらえたのだ。少女の一撃はとてつもない威力だったのだろう。敵が水平に数百メートルにももの距離を、森の木々を薙ぎ倒しながら吹き飛ばされていた。

そんな威力の攻撃を受けた敵がまだ生きているのか、オールマイトには判断できない。しかし、もし先の少女の攻撃を受け、瀕死ながらも生きているのであれば、まだ助けられる。

だが、もう一度あの威力の攻撃を受けてしまったら、あの敵は確実に死んでしまう。あの少女の攻撃はオールマイトですら、受け切れるか怪しいほどの威力なのだ。しかし、遠すぎた。あまりにも遠すぎた。このままでは自分がたどり着く前に少女の一撃があつての命を確実に刈り取るだろう。

今の全力疾走ですら、通常の限界を超えて出している。これ以上は自分の命を縮めることになる。オールマイト自身感じていた。それでも、オールマイトは止まらない。い

や、さらに加速していく。目の前に救える命があるのに、諦めるなどあり得ない。オールマイトをオールマイトたらしめる、その信念が許しはしない。

「ヒーローはいつだって命がけ!!」

その言葉とともに彼の体はヒーローとしての姿へと変身する。それにより、オールマイトはさらに限界を、いや音を超えた。空気の壁をぶち破り、衝撃波によるダメージも気にとめず走った。

そして、ついに追いついた。すでに体はボロボロで、気を抜けば今すぐにも気絶してしまいそうなほどだ。だが、止まらない。一息で少女の横を通り過ぎ、敵との間に回り込む。

「な!!」

そんなオールマイトの行動に驚く少女。それもそうだろう、少女としては正体不明の怪物に襲われていた男性を助け、襲っていた怪物を倒そうとしていたのだ。それなのに、突然目の前にボロボロの姿の大男が立ち塞がったのである。

しかし、少女は止まらなかった。追撃の一撃をすでに放たれていた。脚部のパワージャツキによる加速と腰についているバーニアのさらなる加速によって生み出された

エネルギーを腕部のパワージャッキを利用してパイルバンカーの要領で相手に叩きつける少女の十八番である。

その一撃が放たれる瞬間を見たオールマイトは自身の危惧していたことが正しかったと悟る。少女から放たれる一撃は敵の命を摘み取るにたる一撃であると。

さらに、オールマイトは少女の拳が突き出されるまでの刹那の間に考えていた。どうすれば少女を無傷で止められるのかを。

ついに、少女の拳が放たれる。たくさんの修行によって身につけたということがよくわかる拳だった。だからこそ、いくつもの死線をくぐり抜けてきたオールマイトにはよく観えた。

少女の拳に対して、回り込む際にうまれた遠心力を利用し、己の右拳を突き出した。

『SMASH』!!

ゴツツ!!!

少女とオールマイトの拳が激突した。その威力は凄まじく、二人の周囲には衝撃による力場が形成されていく。だが、少女の一撃を完全に相殺できた。

しかし、少女の攻撃は終わらない。腕部のパワージャッキが収縮し、さらなるエネルギーを叩きつけてくる。

その追撃に対して、オールマイトは神域の絶技をもって応えた。

完全に威力が相殺された右拳を引き、続けざまに左拳を突き出したのである。オールマイトは何気ないようにやっているが、一歩間違えれば少女かオールマイトのどちらかに重大なダメージが行く方法なのだ。

もしも、パワージャッキの収縮よりもオールマイトの一撃が早ければ、攻撃後の無防備な少女の腕を破壊することになり、逆に遅ければパイルバンカーの直撃を受けることになるのである。

そんな危険な綱渡りすらも、オールマイトにとっては普通のことではしかない。そして、少女の追撃に対しても相殺を成功させたのだ。

自分の攻撃を完全に相殺されて呆然としている少女に対して、彼はその大きな胸を張り、告げた。

「落ちつきなさい。私が来た!!」

突然の出来事に響は唖然としていた。自分の目の前にいる大男は全力ではないとはいえ、ガングニールによる一撃を相殺したのである。そんなこと同じ装者たちでも難しいだろう。唯一できるとすれば、彼女の師匠である風鳴弦十郎くらいである。

そして、目の前の大男はそんな不可能に近いことを、さも当然のごとくやってのけた。本来であれば、そのような相手が突然現れれば警戒の一つでもするべきなのであろうが、いかんせん、立花響という少女にはそういった警戒心は無いに等しい。

彼女元来の性格がそうであることに加え、専らそういったことは親友である小日向未来が担当していたためでもある。

人を疑わないということは、人生において不利になることが多い。しかし、今回に限っては彼女の性格が幸いした。

「あ、はい。」

気の抜けたような返事とともに、響は拳を降ろした。

大男はそんな響の様子に大きく息を吐き、安堵したようだった。

「さて、どうしてこんなことをしたのかなど、いろいろと聴きたいところであるが、まずはお互い自己紹介をしましょう。まずは私から、知っているかもしれないがね。

私の名前はオールマイト。ヒーローだ。」

「オールマイトさんですか。すみません、聞いたことないです。」

響の知らないという言葉にオールマイトは内心落ち込みながらも、話しを続けた。

「それでは、少女よ。君のこと教えてもらえるかな?」

オールマイトの質問に響は元気に返事を返すのだった。

「はい!立花響、16歳。誕生日は9月の13日で、血液型はO型。身長は157cmで、体重は恥ずかしいので秘密です。趣味は人助けで、好きなものはご飯アンドンご飯!あとは・・・彼氏いない歴は年齢と同じ!!」

相変わらなければならないことまで言うのは、響らしいといえるべきなのだろうか。

オールマイトはそんな響の自己紹介に多少面食らっていたが、すぐに持ち直し笑い始めた。

「H A H A H A!元気がよくて大変よろしい!」

「はい、元気の良さだけが取り得だつてよく言われます!」

(それは、ほめ言葉なのだろうか?まあ、こちらの会話に乗ってくれるだけありがたいが。さて、どう切り出すべきか。)

オールマイトは響の素直を少し心配しつつも、響の行いを窺めようとしていた。

「とりあえず、お互い自己紹介を終えることができたな。さて、本題入らせてもらいたんだがよろしいかね、立花少女よ。」

「はい、大丈夫です。あっ、そうでした!オールマイトさん!私も質問したいことがある

んです！」

オールマイトはこじれることなく事情を聴くことができそうで、安心しつつも、響からも質問があるという言葉に違和感を覚えていた。

ミシッ

話しを始めようとしたそのとき、オールマイトの後ろから木の軋む音が響いた。

「うっ、俺、何でこんなところで寝てたんだ？それに体が痛い。」

それはオールマイトに襲いかかろうとして、響に吹き飛ばされた少年が目覚めた音であった。

少年が目覚めたことに気づいたオールマイトは少年の元に歩み寄った。

「よかった。少年、目を覚ましたようだな。」

少年の寝ぼけた頭は、オールマイトを認識した瞬間完全に覚醒する。そして、自分が先ほど行ったことも思い出したのだった。その、記憶に少年は顔をうつむかせ、罪悪感を感じていた。

そんな少年の姿を見たオールマイトは十分に反省していることを感じていた。

「少年。君が何を思ってあんなことをしたのか、私は聴かない。だが、一つだけ言わせてもらうなら君にこの言葉を贈ろう。『Plus Ultra』。人生はまだ長いぞ、諦め

るにはまだ早すぎる。」

「はい、・・・オールマイト。」

オールマイトの言葉を聴いた少年は顔を涙で濡らしていた。

「さ、今日はもうお家に帰りなさい。」

再び、オールマイトは優しい声色で少年に声をかけた。

少年は涙で濡れた顔を腕でぬぐい、まっすぐオールマイトを見据えて口を開いた。

「ありがとうございます、オールマイト。俺こんな姿だけど、頑張つてあなたみたいにな立派なヒーローになります。」

少年の誓いを聞き届けたオールマイトは無言でサムズアップする。少年もそれになり、サムズアップした。

そして、そのまま後ろを向き、走っていったのだった。

ここでオールマイトに助けられた少年がこれから何をなしていくのか、それを語るのはまたいつかの話。

そして、響は話について行けず、置いてけぼりになっていた。

事情説明と異変

響がオールマイトと少年の青春劇について行けず呆然としているころ、響に置いて行かれた翼とクリスはシンフォギアを身に纏い、響が飛び出した方向に向かっていった。

二人が響のいると思われる場所に向かってしていると、激しい衝突音が2度響いた。

「くっ、立花はすでに戦闘しているようだな。急ぐぞ、雪音！」

翼は一人で戦闘していると思われる響を心配し、さらに加速していく。

「ちよっ、待てよ先輩。あたしはあんたらみたいな体力バカじゃねえんだよ！」

クリスはさらに加速していく翼について行くのに、必死なようだ。

こればかりは、装者それぞれの特性の違いによるものが大きいので仕方ないのだろう。翼は剣と機動力による白兵戦を、クリスは銃火器による広域制圧を得意としている。そのため、翼とクリスとの距離は徐々に開き始めていた。

「ちっ、やっぱり先輩のほうが速え。」

クリスは悔しそうに呟くが、けしてクリスが遅いわけではない。二人とも常人では考えられないほどのスピードで森の中を駆け抜けているのである。

森の中を駆け抜け続けた二人は先の開けた場所に立つ響の姿を捉えたのだった。そして、響の隣に立つ大男の存在にも。

翼とクリスは大男の存在に警戒しながらも、響との合流を優先した。

「無事か、立花！」

オールマイトは非常に困惑していた。敵の少年を家に帰し、立花少女への事情聴取へ移ろうとしたところ、少女と似た格好をした二人の少女がオールマイトへの警戒心をあらわにしながら現れたのである。

警戒されていることに、内心落ち込みながらも少女たちへ声をかけた。

「あく、少女たちよ。少しお話しを聴きたいのだが、よろしいかね？」

そんなオールマイトの言葉に最初に反応したのは、先ほど自己紹介を行っていた響であった。

「はい！何でも聴いてください！」

響の言葉に二人は驚きの反応を示す。

「はあ？いきなり何言ってやがんだこのバカ！無用心にも程つてもんがあんぞー！」

クリスは響の言葉に呆れと怒りの混じったような強い言葉で苦言をこぼす。しかし、それは心配を素直に表すことができない故の不器用さからくるものであった。

「雪音の言うとおりだ、立花。我々はこの世界に来て間もないのだ。誰が味方で、誰が敵かすらわからない状況で動くのは危険過ぎる。」

翼は周囲の状況が不透明な現状で不用意に動くことの危険性について説く。生来の真面目さと三人の中で最年長であるからこそその責任感故だろう。

だが、その程度で止まる響ではない。

「大丈夫です！ オールマイトさんは良い人です。」

自信満々に答える響に、またいつものが始まったと二人は諦めとともにため息をこぼすのであった。

三人の中で、意見がまとまった（押し通した？）の察したオールマイトは再び問いかけた。

「いろいろなと聴きたいことがあるのだが、まずはそうだな。君たちは何者かな？」

たった少しの時間で、少女たちの核心にせまるところはさすが年長者というべきだろう。亀の甲より年の功である。

しかし、オールマイトの質問はある種の賭けでもあった。この質問の答えしだいでは彼女たちは敵側に回ることになるのだ。立花少女だけでも厳しい状況なのに、さらに二

人の少女を相手にしなければいけない可能性にオールマイトはひっそりと冷や汗をかいていた。

そんなオールマイトの不安の斜め上に行く答えが返ってくるとは、さすがの彼も予想できなかった。

オールマイトの質問に対し、翼が口を開く。

「私は風鳴翼と言います。こちらが雪音クリス、立花響です。我々はあなたたちから見て異世界と呼ばれる世界から来た者です。そして、国連直属機関S・O・N・G所属のエージェントです。」

さすがのオールマイトも、異世界からの来訪者とは想像もしていなかった。

しかも、未成年の少女たちが国連直属の組織のエージェントであるなど、オールマイトには信じられなかった。さらに、そんな存在がわざわざ異世界であるこちらに来る理由など、さっぱり見当もつかなかった。

「ふーむ。その顔を見る限り嘘では無いのだろう。しかし、君たちのような年若い少女がエージェント、それも国連のような公的組織に所属しているとは、そちらの世界にはヒーローはいないのかね？」

オールマイトはその言葉の端々から少女たちへの心配をを滲ませていた。

しかし、クリスに一蹴されてしまう。

「ヒーローとか何言ってるやがんだ、おっさん。アニメじゃねえんだぞ。」

「雪音の言うとおり、私たちの世界にヒーローなどはいません。あえて言うなら、防人たる私たち装者がそうであると言えます。」

オールマイトの質問に対し、翼が極めて冷静に答える。

「そして、私たちをあまり侮らないでいただきたい。これでも、いくつも修羅場をくぐり抜けています。」

「そうか、それはすまなかつた。しかし、君たちが戦うことに慣れていたとしても私が心配しない理由とはならないことも忘れないで欲しい。」

「ありがとうございます。それで話の続きですが、我々の世界には、ノイズと呼ばれる特異災害が存在します。それに対抗するためには、私たちが纏っているこのシンフォギアが必要なのです。」

「装備だけなら君たちが戦う必要はないだろう。他に理由があるのかな？」

「ええ、このシンフォギアは誰にでも扱えるものではないのです。このシンフォギアは使用者の歌をエネルギーとして起動します。ですが、その歌が適合しなければシンフォギアを起動することすらできません。」

少女たちが戦わなければいけない理由は理解した。しかし、そのノイズと呼ばれる災害は少女たちを危険に晒さなければいけないほどのものなのか？そんな疑問をオール

マイトは抱いた。

「何故、ノイズとやらには君たちしか対処できないのかい？ 災害というのなら、軍などでも対策を考えると思うのだが。」

その疑問に対してクリスが答えた。

「ノイズは便宜上災害と言っているが、本来は人間を殺すための兵器だ。」

「なんだと!？」

「そしてノイズには厄介な能力があつて、そのために必要なのが、このシンフォギアだ。」
オールマイトは少女たちの説明を聴き、何故少女たちが戦わなければいけないのか理解した。

「君たちが戦わなければいけない理由は理解した。ではどうして君たちがこの世界に来たのか、目的は何なのか教えて欲しい。」

オールマイトの問いに答えたのは翼やクリスに台詞を取られていた響だった。

「私たちはこの世界で起きている異変を解決するために来ました。最近何か異変が起きてませんか？ 他の世界に行ったときは、その世界でノイズが出現したりしてたんですけど。」

響の質問にオールマイトは最近出沒するようになった厄介な敵のことを思い出していた。

「ふむ、異変かどうかは確証は持てんが、最近おかしな敵が出没しているのだ。」
オールマイトの言葉に響たちは少し困惑していた。

三人を代表するかのごとく響は手を挙げ、疑問を口にした。

「あのお。オールマイトさんって何者なんでしょうか？」

そんな響の質問にオールマイトは改めて自己紹介をするのだった。

ヒーローのいる世界

ある程度、響たちが自分たちの事情を話し終えたところで、響はずっと気になっていたことを口にした。

「あのく。オールマイトさんって何者なんでしょうか？」

「私が何者かって？ H A H A H A !! 私の名はオールマイト!! ヒーローだ!!」

彼はその逞しい胸を張り、堂々と名を告げた。

そんな彼の自己紹介に響たちは呆然としていた。しかし、クリスが最初に気を取り戻した。

「はあ？ ヒーローとか、おっさん、正気か!？」

「正気も何も私はいっだって本気だ!」

クリスの厳しいツツコミに対しても動じることなく、己を誇るオールマイトの姿は確かにヒーローだった。

「オールマイト殿、ヒーローとはどのような者なのですか？」

続いて翼からはヒーローについての質問が出た。

「ヒーローについて説明する前に、君たちに説明しなければいけないことがあるだろう。まず、そちらの世界では『個性』という言葉聞いたことがあるかね？」

「それは、字のごとくの意味ではないのですか？」

「ふむ、やはりというべきだろう。大前提として君たちに理解してもらいたいのがこの世界には『個性』と呼ばれる異能が存在する。そして、それは字のごとく人それぞれにまったく違う形で発現する。」

「なんか、超能力みたいですね。」

響から感心したような言葉が漏れた。

しかし、クリスや翼はそうは捉えなかった。

「何呑気なこと言ってるやがんだ、このバカ!! 面倒くせえことになってきてんだぞ!!」

「オールマイト殿、その『個性』というものに対して国家はどのような対応をしているのですか？」

翼とクリスは一般人が力を持つことの危険性にすぐさま思い至ったのである。

「一般的には法律により『個性』の使用は禁じられている。」

オールマイトの言葉に響を除く二人は顔をしかめた。

「やはり、というべきか。」

そんな翼たちについて行けてない響は混乱していた。

「やはりってどういいうこと何ですが？三人だけで納得してないで、教えてくださいよ。」

話について行けず、騒ぎ出す響にクリスがキレた。

「うるせえ、このバカ!!いいか、一度しか言わねえから耳の鼓膜ぶち抜いてよく聞きやがれ!!」

(鼓膜をぶち抜いたら何も聞こえないのではないか?)

クリスの独特な言い回しにオールマイトは心の中でツツコンでいた。

「いいか、一般的に禁じられているってことは、一般的じゃねえやつらは禁じられてねえ。もしくは無視しているってことだ。理解したか？」

「うん、なんとなくはわかった。でもなんだかんだ言っても教えてくれるクリスちゃんってやつぱり優s「ああん、なんか言ったか？」あだ、あだだだ!痛い!痛いよ、クリスちゃん!!」

クリスを褒めようとした響であったが、クリスの照れ隠しの意味も込めた梅干し攻撃(こめかみを拳でグリグリするあれである)に悲鳴をあげていた。

「雪音少女の言うとおり一般的には禁じられているだけであって、『個性』の使用を許可されている者はいる。それがヒーローだ。当然私もその一人だ。」

「ほえ、オールマイトさんってやつぱりすごいんですね。さっきも私の拳を相殺してましたし、なんか師匠みたいです。」

響は呑気にオールマイトのことを褒めていたが、その言葉を聞いた翼とクリスは驚き、目を見開いた。

「なっ！まじかよ！」

「立ち振る舞いから相当な実力であるとは思っていたが、まさか司令と同等とは。」

驚いている少女たちにいまいちついて行けず、オールマイトは首をかしげていた。

「あ、立花少女よ。師匠とはどなたかね？」

「はい！私たちに戦い方を教えてくれた師匠で、私たちの所属するS・O・N・Gの司令官です。シンフォギアを使った私たちよりも強いんですよ。」

「H A H A H A！そんなに強い方なのか、シンフォギアとはすごいな！」

オールマイトは少女たちより強いシンフォギア装者がいることに感心していた。

「ん？何言ってるんだおっさん。あのおっさんがシンフォギア使えるわけねえだろ。」

しかし、クリスのツツコミにオールマイトは自分と少女たちとの認識のズレに気づき、恐る恐る尋ねた。

「もしかして、生身で？」

「非常に理解し難いですが、その通りです。」

待っていたのは翼からの無常なる肯定であった。

「いやいや！私でも君たちの攻撃を生身で完全に防ぐなんてできないぞ!」

オールマイトは響たちの師匠の理不尽さに動揺をあらわにする。だが、そこに響からの無常なる追撃が入ってしまう。

「でも、師匠言っていましたよ。『漢の鍛練は飯食って、映画見て、寝る。それで十分よ。』って。」

「oh。」

あまりの衝撃に言葉を失うオールマイトであった。

「そんなんで、強くなれるのはおっさんとお前だけだつての、このバカ!!」

言葉を失ったオールマイトの代わりにクリスからツツコまれた響であった。

「ま、まあ、にわかには信じがたいがとりあえず話しを続けよう。」

なんとか気を取り直しオールマイトは話しを再開した。

「私が『個性』の使用を許可されているヒーローであるところまでは話したね。では、我々ヒーローの活動について話そう。主な活動は3つある。慈善活動と災害救助、敵の捕獲だ。」

「前の2つはわかりますが、敵の捕獲とは?」

翼が疑問の声をあげる。

「敵とは、先程雪音少女の言っていた法によって禁じられている『個性』を乱用する者たちのことだ。」

「それじゃあ、さつきオールマイトさんに襲いかかっていたのって……。」

響は先程の光景を思い出して口を開く。人とは思えぬ異形な存在が人に襲いかかる瞬間を。

オールマイトは響の言葉に頷き、言葉を続けた。

「あの子も敵だ。しかし、誤解しないで欲しい。敵にも様々なタイプがいる。先程の子のように己の『個性』に悩み、自暴自棄になってしまう者や己の快楽のために『個性』を悪用し殺人や強盗を働く者もいるのだ。そして、そんな敵たちに対して我々ヒーローは対処している。」

ときに、立花少女よ。先程は助けようとしての行動だったのだろうが、あれはやりすぎだ。生死問わずな重犯罪者でも無い限り敵にも人権が保証されているのだ。もしも、あの敵が死んでしまったら私は君を逮捕しなければならなくなっていたぞ。」

オールマイトの言葉に響は大きなショックを受け、顔を俯かせていた。

「立花……。」

そんな響を見て、翼やクリスも声をかけられずにいた。

ガシツ　ワシヤワシヤワシヤ

「ほえ、わわわっ。」

突然オールマイトが俯く響の頭に手を置き、撫で始めた。

「H A H A H A！そう、落ち込むな、立花少女よ。」

「で、でも!!」

「誰も死んでいない!!それで良いじゃないか。君はまだ子供なんだ、全て完璧に出来るなんて思わん。というか、私にも無理だ。」

あつけらかんとしたオールマイトの言葉に響は驚いていた。

「君の行動は確かに浅慮だったと言えるだろう。・・・それがどうした。」

「有名なヒーローたちの多くは学生時代に様々な逸話を残している。しかし、皆同じくこう締めている。『気づいたら体が動いていた。』つと。」

「君はヒーローになれる。」

「・・・はい!!」

オールマイトの言葉に響は俯いていた顔を上げ、元気に答えたのだった。

「つて、何勝手に勧誘してんだおっさん!つーか、先輩も止めるよ!!」

しかしそんな感動的な雰囲気の中、クリスのツツコミが冴え渡ったのだった。

「いや、素晴らしい演説に感じいつてしまったな……。」

「H A H A H A！バレてしまったか。雪音少女、素晴らしい洞察力だ。君もヒーローにならないか？」

「開き直ってんじやね〜!!」

どこの世界でもクリスはツツコミ担当のようである。

「H A H A H A！つぐ!!? ……カハッ！」

オールマイトは突然口を押さえた。するとその直後、勢いよく吐血したのだった。

ヒーローの裏事情

「H A H A H A！ つぐ!!！．．．カハッ！」

響たちとの会話の中、オールマイトが突如として口元を手でおさえたかと思うと、直後盛大な吐血をしたのだった。それは口から血の滝が流れるかのようだった。

「うええ!!！」

「お、おい！大丈夫なのかよ、おっさん！」

「まずい！この量の吐血は命に関わることになりかねないぞ！」

さすがの3人でもオールマイトの吐血に驚き、動揺を隠せなかった。

「もしかして、私のせい!!？どくしよ〜！どくすればいいの〜!!！」

「うるせーぞ、この馬鹿！少しは落ち着くつてことを学びやがれ！」

響は自分の攻撃によるダメージではないかと焦り、雪音はそんな響に対して落ち着かせる意味も含めた罵声を飛ばす。

そんな中、冷静だった翼がオールマイトのもとに近づき口を開いた。

「オールマイト殿、大丈夫ですか？ひとまず安静になりましょう。歩けるのであればその木にもたれ掛かるように座ってください。私で良ければ肩を貸ししましょう。」

「グフツ、だ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう、カハツ。」

翼に礼を言おうとしたオールマイトであったが、再び血を口から嘔き出してしまった。さらにダメ押しのごとく体のいたる所から白煙が上がり始め……。

ボン!!

そんな軽い爆発音とともにオールマイトの体から大量の白煙が撒き散らされオールマイトの2mを超える巨体を完全に覆い隠してしまった。

「うええ〜!？」

「いきなりなんだってんだ!!」

「くっ、抜かった! 敵襲か!？」

突然の事態に装者3人は驚きつつも、すぐさま臨戦態勢へと己のギアを切り替える。そんな彼女たちに煙の中から声がかけられた。

「大丈夫だ、少女たちよ。落ち着いてくれ。私は無事だ。」

その声とともに煙が徐々に晴れていく。しかし、そこにいたのは先程までの筋骨隆々の大男ではなく、一見骸骨に見えてしまう程ガリガリに痩せ細った長身の男であった。あまりにも痩せているために着ているTシャツがぶかぶかとなってしまうほどの

だ。

「えくと、オ、オールマイトさんですか？」

先ほどの姿からのあまりの変化に響の口から洩れたのが疑いの言葉であったのは、致し方ないことなのであろう。それほど目の前で起きた現象は、彼女たちの持つ常識を軽々と超えていつてしまうほどの衝撃を持つていたのだから。それを責めるのはまだ成人を迎えてすらいない彼女たちには酷な話であらう。

突然の出来事に動揺している彼女たちの質問を受け、一見骸骨に見えなくもない男性は口を開いた。

「ああ、私がオールマイトだ。驚かせて済まないな、少女たちよ。」

骸骨のような男性は、先ほどまで筋骨隆々な巨漢とは似ても似つかないが肯定の言葉を返す。

「えく!!個性つてこんなこともできるのく!!」

「はあ!?!さつきまでムキムキだったやつがいきなりしぼむなんて常識的に考えてありえねーだろ!」

目の前で起きたことは、その場で目にしていたとしてもすぐには受け入れられないのも無理がない程度には衝撃的な出来事であり、装者達の中では比較的常識人であり、(不本意ながら) ツツコミ担当のクリスにとってはそうそう受け入れられるものではなかつ

た。

「先ほどの姿はオールマイト殿の話されていた『個性』によるものなのでしょうか？」
「ああ、その通りだ。この姿こそが現在の私の本来の姿だ。」

翼の指摘に対し、オールマイトはそれを認めるのだった。

しかし、オールマイトの言い回しの違和感にクリスが気づく。

「おっさん、今『現在の私』って言ったよな？ どういうことだよ？」

「雪音少女は察しが良いね。本来の私はこのような貧弱な姿ではなかった。しかし、今から5年前とある敵との戦闘で胃全摘、呼吸器官半壊という重傷を負わされてしまった。それ以来、私の身体は徐々に弱っていつてしまったのだ。ついにはこのような骨と皮だけの姿になってしまった。ここまで弱ってしまった私はヒーローとして活動することができない時間に大きく制限を受けることになってしまったからね。」

オールマイトの言葉に装者たちは少なくない衝撃を受けていた。

それもそうだろう。オールマイトの置かれている状況は筆舌に尽くしがたいほどに困難なもので、ともすれば命に関わるレベルの無茶なのだから。

「おい、おっさん!! あんたの今の状況を知っているやつは居るのか!？」

普段は口での当たりは強いクリスですらオールマイトには悪態どころか、心配の言葉をかけてしまうほど彼の現状は逼迫しているのだ。まあ、その心配の原因の一つは人助

けを趣味と言ひ張るある少女の姿と重なったのもあるだろう。

ヒーローの資質とは

「おい、おっさん!! あんたの今の状況を知っているやつは居るのか!？」

クリスから心配の言葉が聞かれた。それもそうだろう、彼女の言動は育ちのせいでも少ひねくれている、その根っここの部分は世話焼きで優しい少女なのだから。

そんなクリスの心配にオールマイト改め八木はサムズアップしながら返す。

「もちろん、知っている者はいるさ。しかし、私の負傷は世間に知られれば少なくなる動揺を引き起こす程度には影響力があるのだ。それ故に、知っている者はごく限られた数人のみなのだ。」

八木の言葉は響たち3人に様々な衝撃を与えた。

「それって、知ってはいけないことを知ってしまった私たちは口封じされちゃうんですか!?! こう、ドラマみたいに!？」

「ブフー!! な、何を言うんだ立花少女! そんなことをするわけないだろ!？」

響のアホというか、どういう思考回路から弾き出されたのか問いただいたくなるような発言に強い八木は強い否定を示す。

重傷を負い、かつてのように活動できなくなったといえども、その身は、その心は、そ

のあり方は今も変わらず平和の象徴なのだから。

「そ、そうですね。ごめんなさい、オールマイトさん。」

「なに、わかつてもらえたのならそれで何の問題もないさ、立花少女。」

八木が響を落ち着かせている間、思考の内に沈んでいた翼が口を開く。

「オールマイト殿、無礼を承知した上で、お頼みしたいことがあります。」

「うん、いいよ。」

まさかのノータイムの了承である。

「ちよつと待ておっさん!!」

堪らず、クリスからツツコミが入る。オールマイトの即答に了承された翼すら驚きのあまり呆けてしまっていた。

「先輩はまだ何も言ってねえのに、了承するとかあまりにもお人好しすぎんだろ!!」

「この世界のヒーローってのはこうもお人好しばつかなのか!？」

そんなんじゃない、真つ先に戦場いくさばでくたばるぞ!!」

「それは違うぞ、雪音少女よ！ヒーローってのは多かれ少なかれあれど、どいつもこいつもお人好しのおせっかい焼きばかりさ。」

ヒーローというのはね、命がけで綺麗事を実践するお仕事なのさ！」

八木の言葉は一見軽く思える。しかし、装者たちには違ってみえた。

それもそうだろう。その言葉は八木が、オールマイトが、人生をかけて実践してきたことなのだから。

その言葉は彼のヒーローとしての信念であり、誓いなのだから。

そして、八木は続けて口を開く。

「それと、私は考えなしに風鳴少女の頼みを受け入れたわけではないぞ。」

そう言って八木なりの見解をのべ始めた。

「まず、君たちの人柄だね。立花少女は特に分かりやすい性格をしているからね。見知らぬ人が襲われているところを目撃したとき人がとる行動はいくつかあるが、『助ける』というの、そうそうできることでは無いのだ。それこそ、私がヒーローの資質として考えるほどに。そしてその資質を風鳴少女と雪音少女、君たちも持っている。まあ、些か雪音少女は分かりづらいというか、ひねくれていたがね。」

「~~~~~!?何「待て！雪音！」離せ、先輩!!このおっさんはここでしめる!!」

八木の言葉に突つかかろうとするクリスを翼は必死に抑える。

「おっと、失言だったね。申し訳ない、だが乏すつもりはないのだ。え、それで続けても良いかね？」

「はい、大丈夫です。それと、クリスちゃんは照れているだけです。気にしないでください。」

響が八木に答える。

「何言つてやがるこの、すかぽんたん!!」「落ち着け雪音！」

「本当に大丈夫かね。まあ、続けようか。次に君たちの状況だね。見知らぬ土地で現状の把握が十分でなく、その土地や現状に精通していると思わしき人と接触できた。となれば、その人物やその人が所属する組織に協力を求めるとするのが普通だろう。」

「はへ。そこまで考えているなんてすごいです、オールマイトさん。」

響が感嘆の言葉をこぼす。

「まあ、確証があるわけではないから結局は勘なんだけどね！」

「あだつゝゝ?!？」

八木の暴露に思わずリアクションしてしまう響であった。

「とはいえ、あながち間違いではないのだろう？風鳴少女よ。」

「ええ、その通りです。オールマイト殿。その慧眼、お見事です。」

「慧眼なんてもんでは無いさ、言っただろう、あくまで私の勘さ。

とりあえず、着いてきてくれないかい？私の勤めている学校で改めて詳しい情報の交換や協力の内容を話そう。」

こうして、一行は八木の勤める学校、雄英高校に向かうのだった。